極寒キャンプ 2023

2023 年 2 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

3 年ぶりに極寒キャンプに行ってきた。今年は富士山麓にある「ふもとっぱらキャンプ場」で、翌日の温泉宿の宿泊もなく 1 泊 2 日のシンプルな旅になった。

■ふもとっぱらキャンプ場

極寒キャンプはコロナ禍で 2 年間中止していた。しかし久しぶりの実施にあたり例年行っていた猪苗代湖畔ではなく、富士山の西山麓にある「ふもとっぱらキャンプ場」を選んだ。

その理由はオープンエアーで密にならないからキャンプブームが到来しており、その中でもこのキャンプ場は YouTube やテレビで紹介されてかなり有名になっている。私たち“チーム極寒”も時代に乗り遅れまいと予約をしたが、真冬でも混んでおり簡単に予約が取れなかった。

そして今、私が運転する車はチーム極寒のいつものメンバーを乗せて東名高速道路を走っている。あいにく雨が降っているが、幸いにして天気は回復に向かっている。

キャンプ場に着く。入口には入場ゲートがあって予約していない車は入場できない。ここで料金を支払うだけで、あとは広いテントサイトの好きな場所にテントを張るだけになっている。ちなみに 17 時にゲートが閉まるので、夜間に来てテントを設営するようなことはできない。

夕方には雨があがり富士山が目の前に大きく見えてくる。何と言ってもこのキャンプ場の最大の売りはこの景色で、主役は富士山とその前に広がる広大なテントサイトだ。“ふもとっぱら”たる由縁だろう。

【富士山とふもとっぱらキャンプ場　　（写真は翌日撮ったもの）】

ふもとっぱらキャンプ場の HP を見ると、興味深い歴史が書かれている。

この場所は戦国時代には金の採掘が行われていたが、山崩れにより打撃を受け、明治時代以降には造林が行われ森林になった。およそ 90 年前から東京農業大学の農場として使われていたが、2005 年に「株式会社ふもとっぱら」が創業する。会社は林業を主軸にして、農業、ジビエ料理、キャンプ場運営などが行われるようになった。

そして現在の姿に至ったが、昔の牛舎は売店になり、キャンプ場内にある金山テラスは地元の食材や周辺に生息するニホンジカの肉をジビエ料理として提供している。テントサイト以外にコテージ、別荘風の山荘、団体向けの宿泊棟もある。

キャンプ場だけが有名になっている感じがするが、自然を活かしながら環境保全を意識した多角的な経営を行っている。

■キャンプは変わった

数年前の極寒キャンプの旅行記でも書いたが、キャンプはテントをはじめとして様々な道具が登場して昔とは様変わりしている。

本日張ってあるテントの半分とは言わないまでも 1/3 くらいのテントには煙突が付いており、そしてその煙突から煙が出ている。冬のこの時季だからなのか、中で薪ストーブを燃やして暖をとっている。従ってテントの形もひと昔前に流行ったドーム型ではなく、先が尖ったティピー型のテントが多い。ティピーはアメリカインディアンの野営用の住居で、最大の特徴は中で火を焚くことが出来ることだ。

私も、先日友人の家の薪ストーブで温まってきたが、その威力は凄かった。それを真冬のキャンプ場に持ち込むことは理解できないこともないが、せっかくのアウトドアなのにそこまでするかという意見も聞こえてくる。残念ながら私は薪ストーブのテントに泊まったことがないので、コメントは控えるが、一度は体験してみたいものだ。

【ティピー型のテントの煙突から煙が出ている】

最近は 1 人でキャンプを楽しむ、いわゆるソロキャンパーが増えている。これも YouTube やテレビの影響だろう。

私が中学生や高校生の頃に行ったキャンプではフォークダンスやキャンプアイヤーは付き物だった。その後社会人になって車で行くオートキャンプブームが到来して仲間や家族と楽しむキャンプが主流になった。どれも人と人とのふれ合い、コミュニケーションを図るという目的がベースにあったように思う。

ソロキャンプでは、1 人で料理を作り、1 人でそれを食べ、1 人で焚火の炎を見つめて、1 人で酒を飲む。誰との語り合いもなく、共同作業もないからコミュニケーションは無い。

しかし実際にはそんなことはない。最近のソロキャンパーはスマートフォンを使って別の場所にいる友人とコミュニケーションをとり、あるいは 1 人キャンプの様子を SNS にあげる。やはり時代の流れだろう、通信ツールの進化がキャンプを変えた。

昔のキャンプ場では水道と流しと竈（かまど）が集まった炊事場というものがあったが、このキャンプ場にはそんな炊事場はない。炊事は各テントでするから共同の炊事場な不要で、水道と流しの小さな水場があるだけになっている。ただこの水場がテントサイト内の至る所にある。

そして水場以外にも設備は充実している。トイレは立派で太い木材でできている。内部は清潔でもちろん水洗、さらに温水のウォシュレット、便座も暖かい。手を洗う水も石鹸も自動的に出るから至れり尽くせりだ。おそらく最近オープンしたキャンプ場や人気のキャンプ場はどこも設備が整っているのだろう。そうでないとブームにならない。

どのスポーツも若い女性がやり出すとブームになる。テニスもスキーもゴルフもしかりだ。その若い女性客を呼ぶためには清潔なトイレは必須条件なのだろう。

【右が綺麗なトイレ棟　左奥にある青い壁の建物が昔の牛舎の売店　左手前が水場】

今回、私が見渡しただけでも 200 以上のテントが張られている。余計なおせっかいかもしれないが、売上げを簡単に試算してみる。

料金は 1 人 1000 円、車 1 台が 2000 円になっており、テント 1 張りに 3 人と車 1 台とすると 5000 円、テント数を 200 として本日の売上げは約 100 万円になる。土曜日はもっと混み、シーズンによっても混むから年間 5 億円以上がテントサイトだけで売り上げられる。

仕入れも人件費もあまりかからないから、なかなか良いビジネスになっている。
問題は以前のキャンプブームの時もそうだったが、ブームというものは必ず過ぎ去るものなので、設備投資と費用の回収をどう折り合いをつけるかだろう。

そんなことを考えていたら、以前のキャンプブームの時に友人と ODC（Out Door Corporation）なるアウトドアの会社を設立しようと考えたことを思い出した。結果的にはそれは実現しなかったが、別の友人たちからは ODC（Over Drinking Club）「呑兵衛同好会」と揶揄された。
その会社設立を一緒に企画した友人も今回の極寒キャンプに参加している。やはり ODC だったか。

■反省日記
今回の実施は 2 月の中旬ということで例年よりも少しだけ暖かく、猪苗代湖畔ではなく富士山の麓になった。買い出しにスーパーマーケットに入ると、季節的なものか地域的なものか分からないが、鍋にそのまま放り込めるカット野菜が置いていない。そのためメニューはいつものキムチ鍋ではなく“おでん”にした。
おでんという言葉に反応して、筋が多い牛スネ肉を買い込んだが、これが失敗だった。それなりに煮込んだが、なかなか柔らかくならない。残ったので朝食でも温めて食べたが、相変わらずだ。圧力鍋でも持ち込まない限りキャンプで煮込むことは無理と思った方が良い。

そしてこのキャンプ場は非常にだだっ広い。つまり吹きっさらしなので、風が吹くともろに風に当たることになる。今回は夜中に風が吹いてテントロープが外れるというハプニングが発生した。このようなキャンプ場での設営は、例え天気予報が微風でも万全の備えをしておかないといけない。現に鍋の蓋だけが 20m くらい飛ばされていた。

■旅の記録
実施は 2023 年 2 月 19 日（日）～20 日（月）の 1 泊 2 日、その行程を以下に示す。
・1 日目　自宅を 9 時に出発、足柄 SA で昼食、13 時ふもとっぱらキャンプ場到着
・2 日目　11 時キャンプ場出発、山中湖石割の湯で立ち寄り湯、
　　14 時帰宅し近くの安くて旨い寿司屋で昼食兼打ち上げ

総費用は 4 人で約 3 万円になった。1 人あたり約 7600 円になった。
・ふもとっぱらキャンプ場入場料　　6000 円（1 人 1000 円、車 1 台 2000 円）
・山中湖石割の湯　　3240 円（1 割引クーポンで 1 人 810 円）
・夕食朝食の食料、酒、薪など　約 15000 円
・高速道路、ガソリン代　　約 6000 円（移動距離約 260km）
・1 日目の昼食は各自支払い
・2 日目の昼食兼打ち上げの費用はキャンプ以外なので、ここでは計上していない